

京町家と金属作品との親和性の検証

大阪芸術大学 工芸学科 教授 長谷川 政弘

前年度に引き続き「京町家と金属作品の親和性」をテーマにして研究を行った。昨年はコロナ禍において検証のための作品展示は延期されたが、今年 6 月に「祇をん小西」で、12 月に「ザ・ターミナル・キョウト」で展示を終え検証を行うことができた。

研究概要は『近年になり作品展示は美術館やギャラリー空間などのホワイトキューブだけではなく、かつて日常生活空間であった場所にも展示する試みが増えてきた。特に古民家は、注目されている空間の一つである。本研究は、京町家に焦点を当て研究テーマを「京町家と金属作品の親和性の検証」とし、和空間と金属作品との美しく共鳴し合う空間の創造を試み、追求する。』という内容だ。

研究対象の京町家は、間口が狭く奥行きが深い『うなぎの寢床』と呼ばれている特長のある空間である。展示会場は二箇所とした。京都祇園花見小路の「祇をん小西」は、元お茶屋であった建物で、京都仏光寺の「ザ・ターミナル・キョウト」は、元呉服問屋の『木崎呉服店』だった建物である。どちらも現在はギャラリーとして使われている。検証方法としては私の他、第三者の検証として、美術関係者 3 名に展示された作品を見てもらい意見をいただいた。もう一つは来場者に対して研究テーマに関するアンケート調査を行った。

祇をん小西

ここでの展示は、ガラス作家の山本佳子氏と私との二人展という形をとった。展覧会のタイトルは「水景—Waterscape—」とした。夏座敷のしつらいの中、私のモチーフである蓮と山本氏の植物をイメージさせる透明感のあるガラスオブジェで、水辺を感じさせる空間の創造を試みた。展示に関しては作品を多く置かず余白を意識し、和空間がより美しく感じるように作品を配置した。入り口近辺の「格子の間」にはかつてこの場所を使って身支度をした芸舞妓を意識した作品『蕾』のインスタレーションを展示し、次の部屋からは、京町家独自の奥行きを深さを生かして、坪庭を挟んで一番奥にある「離れ」の作品まで視界が届くよう展示を行った。そこに金属とガラスの特徴である光沢のある作品『散華』を配置することで町家と作品が刺激し合いながらも、空間に一体感が生まれた。建築物の中

に自然の要素を取り込む坪庭の存在は、周囲の空間に変化を与え作品の表情をより趣深いものにしていく。

ザ・ターミナル・キョウト

この会場での展示は「うつろいの間—蓮と共に—」というタイトルで個展を行った。これまで私が続けている「蓮シリーズ」の表現方法が 18 年の歳月を経て移り変わっているということと、部屋ごとに表現の違う作品を展示することによって、各部屋の気配が移ろいでいくという考えを込めている。各所の壁面のしつらいとして 3 作家のミニマルな表現の平面作品も加えた。この会場は、間口約 9m 奥行き約 50m の二階建ての大型建築である。ここへ 14 点の作品を展示した。その中の一つを紹介する。「暝色の庭」は 2 階の大広間に展示した。この作品は鉄板でできた何枚もの蓮葉や花、蕾などで蓮池の風景を表現している。作品は土台なしで畳の上に置くだけで自立するような構造となっている。展示は、八畳間と十畳間の襖を外して空間を最大限に使った。壁面、天井、畳、障子戸など水平垂直の強い和空間に金属の曲線、曲面の造形を合わせることによって、いつもの「静」の空間から「動」の空間に変化したと言える。

今回の展示を通して確信した事は金属作品と和空間の相性の良さである。(作品が蓮をモチーフにしていることも要因の一つではある。)その理由は、金属作品はその場の状況に応じて様々な作品対応が可能であるからだ。小さなものから大型作品まで対応でき、用途ある作品もファインアート作品も様々な技法を使って自由に制作ができる。また金属素材は制作目的に応じて選ぶことができ、仕上げ方法や色つけ方法によっても様々な表情をつくり出すことが可能である。金属作品の対応能力は、京町家も含め和空間に対して高いと言える。

本研究の展示画像や検証文、アンケート調査の結果、美術関係者からの寄稿文など詳細は、今回作成した研究報告冊子に詳しく掲載されているのでそちらをご覧くださいと思う。